校長室だより
NO.　３７
令和元年11月28日

すべては光る

梅園小学校長
たか　す　りょうへい
髙　須　亮　平

「織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の違いは？」と問われて

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康は、愛知県が生んだ三英傑と言われ、日本全国で知らない人はないほどの人物です。それは、教科書、歴史小説、テレビドラマ等で取り上げられているからです。そんなことからか、ある６年生の子がこの３人の違いは何かと質問をしてきましたので、この『校長室だより』で考えることにしました。様々な考え方がありますが、私なりのまとめです。

織田信長

まず、３人は戦国時代に活躍しましたが、その享年を調べますと、織田信長（１５３４～１５８２）は４９歳、豊臣秀吉（１５３７～１５９８）は６１歳、徳川家康（１５４３～１６１６）は７３歳でした。ここに１つの違いがあります。織田信長は明智の謀反による自害で短命でしたが、それぞれ約１０歳ずつ生きた長さが違います。ただ、信長と秀吉は３歳違い、家康とは９歳違い、秀吉と家康は６歳違いで、あまり違わないことが分かります。

豊臣秀吉

また、信長、家康は領主（戦国大名・武士）の家に、秀吉は農民の家に生まれたと言われます。そのため、信長と秀吉は主従関係、信長と家康は同盟関係にありました。秀吉と家康は、秀吉が天下を取ってからは主従関係にありました。

徳川家康

次に、この３人の性格の違いを表す句は有名ですね。

鳴かぬなら　殺してしまえ　ほととぎす　　信長
鳴かぬなら　鳴かせてみせよう　ほととぎす　　秀吉
鳴かぬなら　鳴くまで待とう　ほととぎす　　家康

この３つの句から、信長は短気で激しい気性、秀吉は工夫を凝らすタイプ、家康はがまん強い性格と言われていますが、そうでもない面もありました。信長は「がまん強い努力家」というエピソードがあります。信長が１０代の頃、長い槍を作り新しい戦法を発明しました。これは、信長が天才だからと言われましたが、実際は寝食を削り研究し、大うつけ（ばかもの）と言われても長い槍の戦法を完成させました。とてもまじめで研究熱心な面がありました。秀吉は「すべて計算し尽くす」面がありました。秀吉は織田家に仕え、美濃（岐阜県南部）を攻略するとき、敵の武将を味方につけましたが、信長は、その武将を殺せと命じました。普通は殺すのですが、秀吉はその武将を逃がし、万が一の時は自分（秀吉）を人質にするよう言ったのです。これは、単に秀吉の人のよさを示すのではなく、秀吉は、その武将を感激させ自分の評判を美濃に広めようとする深い計算に基づいていました。家康は、がまん強い性格と言われていますが「短気」な面もありました。武田信玄が上洛に当たり徳川領に侵攻した三方ヶ原の戦いでした。信玄は、家康の２～３倍の兵力で進行しましたが、家康の浜松城は素通りし、そのまま無視して西へ向いました。それで家康は大激怒し、家臣らの

反対を聞かずに追撃をしましたが、自身の命も危うくなるほどの大敗北を喫しました。

いろいろな面から違いを述べましたが、一番の違いは次のことと思われます。信長は室町幕府を倒しましたが、謀反によりその後世は続きませんでした。秀吉も天下統一をしましたが、後継者の秀頼の世は続きませんでした。しかし、家康は江戸幕府を開き征夷大将軍を命ぜられました。その２年後に将軍職を辞し秀忠に継がせ、将軍職は徳川が世襲することを天下に示しました。そして、２６５年の徳川の世が続きました。つまり、家康は「守成（守り）の心得」を持ち、その世を継続させたのです。

ここで、家康の「守成の心得」は何から学んだかと言いますと、ある書物を読んで勉強したのでした。それは『貞観政要』という書物なのです。これは、中国で名君の誉れ高い唐（６１８～９０７）の太宗（李世民・在位６２６～６４９）とそれを補佐した名臣たちとの政治問答集でした。これを呉兢という中国の歴史家が編纂しました。この太宗は、軍事にかけては非凡な才能の持ち主で、父・高祖（李淵）を支え、唐王朝の創業を成し遂げた最高の功労者でした。しかし、彼が２代皇帝に就いてからは、その関心は守成にあり、唐王朝の基礎固めに努めたのでした。その守成の苦心からの心得が『貞観政要』にあまさず語られ、この書物を貫いている主題となっています。なぜ守成の心得かと言えば、これを欠けばせっかく手に入れたトップの座を失うからです。そのことは、中国の秦の始皇帝、隋の煬帝の短期の治世から学んでいたのでしょう。

唐の太宗（李世民）

そのようなことで、家康が『貞観政要』を愛読し、儒学者の藤原惺窩（１５６１～１６１９）に講義させ、治世の参考にしたのでした。また、当時の高等教育機関であった足利学校に出版を命じて、その普及にも努めました。さらに、８代将軍の吉宗もこの書物に親しんだということで、紀州家をはじめとして江戸時代の藩主の多くはこの書物を読んでいたと言われます。もちろん代々の将軍も読み継いだということです。

それでは、『貞観政要』とはどんな内容の書物であったか気になります。簡単な言葉で述べると次のようなことが書かれています。

- ○　安きに居りて危うきを思う……今が平穏だからといって明日どうなるか分からないのが世の常。平穏なときほど、一層の緊張感を高めて仕事に取り組み、来るべき危機の時代に備えなければならない。
- ○　率先垂範、わが身を正す……論語に「その身正しければ、令せずして行わる」がある。上に立つ者が十分な説得力を発揮するためには、まず自らの身を正して手本を示さなければならない。そうあってこそ組織をまとめることができる。
- ○　部下の諫言に耳を傾ける……誰でも過ちを犯す。君主も例外ではない。それを指摘する者がいれば過ちは最小限になる。自らの暴走に歯止めをかけるためにも諫言の道を広く開く必要がある。
- ○　自己コントロールに徹する……権力の座にあってもわがままな勝手な振る舞いは許されない。自分の感情や欲望をどう抑えるか。趣味や道楽なども自ずから限度をわきまえて掛かる必要がある。
- ○　態度は謙虚、発言は慎重に……上に立つ者が謙虚であってこそ周りの支持を集められる。地位に伴う責任の重さを自覚できれば軽率な発言は許されない。　など

このようなことを家康が学び、政治に生かしていったのです。この『貞観政要』に流れる名君とは自己犠牲以外の何ものでもありません。だから、考えてみれば割りのよい職業ではないようです。これを実践したのが日本では家康だったのでしょう。